

グローバル化と資本主義の  
精神間の相克  
(一つの原理論の試み)

寺西重郎

2018年10月11日 日経調

## 問題の所在

- ①日本を含むいくつかの国で西洋の近代資本主義が伝播する以前に固有の資本主義的経済発展があったのではないか。そこにはそれぞれの文化に固有の行動様式があった。
- ②固有の行動様式と資本主義は文化（それを構成する社会的信念）の変化によって生まれた。
- ③西洋の近代資本主義の伝播は、西洋の技術とフォーマルな制度を各国に移植した。技術とフォーマルな制度の世界的な収斂、同質化。
- ④経済成長の下、各国の資本主義の文化は行動様式を規範化・世俗倫理化し、制度への埋め込みを経て、それぞれに固有な「行動規範（精神）」を生み出した。
- ⑤各国の精神間の調整が、今後のグローバル資本主義の課題となっている。

# (1) 概念的枠組み；文化・制度・行動規範

## 1. 1 文化

”幾世代にもわたって人種的・宗教的・社会的グループの間であまり変化せずに受け継がれるbeliefと preference(value)の体系“

グライフ；belief=internalized belief（認知モデル）  
+behavioral belief（マグリブとジュノヴァのcultural beliefなど）

これでは不十分で我々はbeliefは

Private-level belief(=internalized belief + behavioral belief)

Social-level belief（社会的信念）

の二つからなると考える。

## 1. 2 制度

①ノース；ゲームのルール

グライフ；（社会的）行動に一定の規則性を与えるルール、belief、norms、組織からなる体系の均衡状態

②グライフのノース批判（=ゲームのルールと定義したのではルールは単なるインストラクションであって、それに従うための動機付けがない）⇒均衡としての制度の考えが必要

③グライフの問題点 = (i) ノースは政府による動機付けを仮定している  
(ii) メタ・ルール (=ethic) による動機付けをグライフは無視

⇒均衡の視点は正しいが、均衡はしばしば不安定であり、実際の制度のenforcementは国家または道徳によるのではないか（グライフ自身規範を制度に含めているがその意味を考察していない。）

## 1. 3 行動規範

制度の制約の下での文化による行動様式の決定（beliefに基づき preferenceを最適化）

———制度は人々の行動の規則性をもたらす（グライフ）

———規則的な行動は、それが成長にとって有効な時、成長の果実を享受する人々の幅広い支持を得る。その結果、規則的行動は規範性を持ち、行動規範が形成される。

⇒ウェーバーの「精神」の誕生

## (2) social-level belief 信念の変化

### 2. 1 西洋における社会的信念の変化 (モキア)

①デカルト、自然法；自然の法則は内在的 (immanent) でなく神によって与えられた (imposed upon the universe) ものである

②ロック、自然法における神の意志の中心は人間の保全である；ベーコン、自然の研究は、神の賢明さを明らかにすることであり、その行動は神の栄光への寄与につながる (宗教的救済)

⇒自然に対する人間中心主義 (Anthropocentrism)

――神は人間が自然を利用しその厚生の上昇に用いることを望んでいるという観念の1500-1700年における誕生 (モキアの言う信念の変化)

## 2. 2 日本における社会的信念の変化

鎌倉新仏教による易行化と廻向の概念

⇒職業的求道行動

——社会的分業の急進展による他者関係の複雑化

⇒仏教における道德律の他者関係に対する不備（社会の同質性の仮定）

⇒室町・戦国の混乱

一揆；シェアの要求（社会的分業の効率効果を否定）

下剋上；縁に基づく（勝俣鎮夫）自己救済（封建的主従関係の混乱）

⇒長期にわたる戦乱⇒新しい道德律の必要と社会的希求 = 日本における信念の変化

## (3) 西洋と日本の経済成長

### 3. 1 西洋の資本主義的成長

#### ① 16, 17世紀

自然の拷問（ベーコンの実験科学）による科学的知識の発達  
有用な知識の国際的市場の発展

#### ② 18世紀；技術革新のself-enforcing cascade（モキア）と科学的知識の工業生産（大量生産）への利用

――生産コストの削減

⇒工業主導の大量生産大量消費社会

―――シュンペーター的成長

### 3. 2 江戸時代日本の資本主義的成長

#### ①職分規制による同質的集団への切り分け

職分ごとの通俗道德のたゆまない開発（鈴木正三（寛永17世紀）、石田梅岩（享保18世紀）、二宮尊徳（天保19世紀））と普及  
武士による道德律の規範の探求（朱子学の受動的 세계觀の否定）

#### ②道德律の進化 ⇒ 行動類型の規則性 — 非対称情報の削減 — 契約作成コストの削減

通俗道德の普及 — 契約enforcementコストの削減

⇒ 社会における取引コストの低下 ⇒ 商業主導（生産は従来通りの小生産者）の経済発展

#### ③小さな国家（例、村落統治、相对済まし令（岡崎））

— — — スミスの成長（明治以降のシュンペーター的成長の導入）

### 3. 3 西洋におけるスミスの成長の限界

#### ①モキアの定義

(i) シュンペーター的成長；技術革新の波

(ii) スミスの成長；道徳律や制度による取引コスト削減効果

#### ②モキアの主張（＝西洋では(ii)は脆弱）は一般化できない

③理由 (i) 神による道徳律の決定とその後の哲学のロールズ的な「薄い道徳律」への退行傾向（テイラー）、(ii) 社会契約論のもと国家による制度ルール構築とその下でのenforcementの高コスト性

⇒ こうした西洋の特殊事情によって取引コスト削減効果が小さい

⇒ 結果的に西洋ではスミスの成長は持続性を持たない事となった

## (4) 経済成長の下での行動様式の制度への埋め込み (inbed)

### 4・1 労働の行動様式

①西洋 デカルト、神の意志の力に干渉しないために、神の命令の下、人間意思で制御可能な機械論的人間論の開発 (テイラー) — (経済成長の下で) 神の栄光のために禁欲的な神の手となることを選択 (ウェーバー) ⇒ 労働力の商品化

②日本 易行化の下での求道的職業行動 — (経済成長の下で) 職分ごとに人格陶冶の形の自己救済 ⇒ 人格に体化された労働 (人的資本の商品化の禁忌)

## 4. 2 資産蓄積行動

①西洋 ロック、自然権（神が人の理性を通じて公布したルールの一部）としての所有権（ロールズ）――（経済成長の下で）神の意志を体現した金融資産の蓄積・運用行動（ブッシュ；投資家は殉教者、ベンジャミン・バーバー）⇒金融市場の発展

②日本 武士はもともとの開発領主的行動から戦闘にかかわる技能者への志向――（経済成長の下で）技能の継承の方法としての「家」の成立と工、商、農への普及⇒フォーク定理（無限くりかえしゲームによる効率）⇒銀行中心の関係依存的金融

#### 4・3 財の生産行動

- ①西洋 自然に関する知見を深めそれを人類のために用いるという人間中心主義（モキア）――（経済成長のもとで）技術革新の制度化と啓蒙思想の下での認知的合理性への傾斜（ハーバマス）
  
- ②日本 自然との共生思想――（経済成長の下で）ものづくりという心的態度の開発と審美的・倫理的合理性の追求

## (5) 結語と残された問題

- ①成長の下で各国の行動様式の行動規範化（ウェーバー的精神の発生）グローバリゼーションの下での違いの顕在化
  
- ②金融市場、労働市場、財市場におけるグローバル化の進展の加速
  - ――ヘクシャー・オリーン定理の下でグローバル化の便益を得るための方法の対立
  
- ③原理論的には日本が最重視すべきは自由貿易

## 残された問題

①マクロの需要・供給の問題は我々のモデルに関連を持つ。

②需要面では生活様式が行動規範から決定される。行動規範から生み出される生活様式は、有用に技術の開発の制度化した状況下では、それに適した技術とをもたらし生産性の上昇につながるのではないか。（人口に関する吉川仮説との類似）。

③現在のアメリカ文明の成功は時短・省力による生活様式提案による（ゴードン）。その衰退は、新しい魅力的な生活様式をもたらししていないことによるのではないか。（AIは情報面での時短・省力でしかない）。

④おそらく日本などの他の文化に基づいた生活様式の提案が今後における課題になる。生産性はそれに付随して高まる。